

昨年暮れあたりから、

『苦海浄土 わが水俣病』

上関原発予定地
(山口県上関町田ノ浦)



1982年に持ち上がった中国電力の原発建設計画。

原発予定地の対岸に浮かぶ祝島では千年も前から自然と共にある暮らしが続いてきた。

島民は豊かな海を埋め立てる原発建設を阻止しようと28年も闘っている。

予定地周辺には絶滅が危惧される多様な希少生物が生息している。



上関町祝島に
行ってきました。

映画「ミツパチの羽音と地球の回転」
チラシより

を著した石牟礼道子氏の作品をずっと読み続けていました。そして、『常世の樹』という本の中に祝島が出てくるのです。

それは上関に原発建設計画が浮上した翌年、一九八三年十月に書かれたものでした。

熊本県の不知火海を水銀漬けにし、多くの水俣病患者を出した新日本窒素と国を患者さんたちと共に告発し続けた石牟礼さんが祝島を訪れ紀行文を書いている。3・11後の今の時代にその文章と出会い、これまでのように上関・祝島の原発反対闘争を聞き流してはいけないという思いが

募ります。

美しい島でした。

8・6ヒロシマの前日に原水爆禁止山口県民会議が主催する「上関・祝島現地交流ツアー」があるのを知り、どうしても参加したくなりました。

全国から集まった人たちで大型観光バスがいっぱいです。祝島に到着した後はみんなで漁船に分乗して魚釣りの予定でしたが、参加者全員が分乗できる漁船数の確保が難しかったということでした。魚釣りに参加しない人たち(私も)は軽トラの荷台に分乗して島めぐ

組織を強化拡大し、階級的労働運動の発展をめざそう！

りをしました。

案内をしてくれたのは

「上関原発を建てさせない祝島島民の会」の人たちです。最初に行ったのは定期船の着く波止場のすぐ側で、対岸の長島の先端がすぐに見える場所です。それが田ノ浦で、原発建設予定地です。目の前に見えてる緑の山をガーンと削ってしまい原発を建てるといふ。なんとも言葉に表しきれない酷さを感じるものでした。大量の電力消費とは無縁な生活が島にはあります。電力会社が言うように原発が作り出すエネルギーが必要であるならば、最大の電力消費地の東京や

大阪に原発を作ればいいのか。テレビや自動車、その他諸々、これでもかこれでもかと消費を煽り、大きな工場を建て、過剰に物を生産し、売れなくなったら操業を停止し、多くの不安定雇用労働者の首を切る。そんなことのためのエネルギーなんていらぬ。原発はいらぬ。

氏本さんのブタ

軽トラは島の集落を抜けて海沿いの道を行きます。祝島はハートの形をしており、そのえぐれた所が三浦湾。その海を見

下ろす斜面は所どころに石積みが見受けられ、畑や棚田の跡が見受けられます。今はそういったかつての耕作地がブタの放牧地になっていきます。氏本農園です。ブタたちは三百六十五日放牧され、夏草が生い茂る耕作地の草



写真は氏本農園のブログからの無断転載です。

やらなんやらを食べ、島民たちから出される残飯を食べて健康に育つていきます。見学者たちからの「かわいい〜」やら「おいしそう〜」やらの歓声と真夏の直射日光を浴びながら暑さしのぎの水たまりの中で寝そべっていました。

神舞(かんまい)

三浦湾に沿って軽トラは走ります。大分県の東半島が見えてきます。島では四年に一度大きな祭りがあります。国東半島の伊美へ神を迎える船を出す神舞です。今年がちょうどその年に当たり、

八月十六日から祭りが始まりです。島を出た人たちがこの時はみんな帰って来るそつです。

公民館で昼食をとり、これまでの闘いのビデオを見せてもらいました。毎週月曜日に行われるデモは三十年間で千回を超えるということでした。

その後は、祝島に一泊することになっていたので、漁船（チャーター船）に乗って原発予定地を間近に視察し、広島に戻って行くみんなとは別行動になってしまいました。

北野貯水池

石牟礼さんが「それは

まことに感動的な手造りの貯水池だった。一段々

の田にゆく綿密な放水口は、湖水の水位をそのまま示す仕掛けとなっていて、島の頂きの広大な台地から、天水は洩れなく集められるとの事だった。

みすみす海に流れ落ちてしまふ水を眺めていた長い歴史があつて、北野協同組合五十戸と云われる水田開発者たちが、約十年がかりで仕上げたと云うこの水は、大正五年、最初の田に給水されたと聞く」と書いている北野貯水池を見てみたかった。島の自治会が運営しているレンタサイクルで自転車を借りて、貯水池を目

指しました。

山の坂道を自転車を押しながら登って行くと、ビワの木の剪定作業をしている老夫婦に出会いました。

「この辺に貯水池はありますか」

「あーこの上にある」

「ここ登って行けますか」

「その横を登って行くのが近い。まむしに気をつけてな」

「えーどうやって気をつけるの……」

「この杖を持っていくといい。これで足元の道をたたきながら行くといい」

ということ、自転車を

置き、借りた杖を振り回しながら行くと、教えられた道はすぐに終わり後は、いつまむしが出てきてもおかしくない藪や葛に覆われた土手でした。

貯水池の水はかなり減っているようにも見えました。貯水池ができて九十六年、どうしても水が染み出ていくという話でした。現在、島の稲作農家は二軒になったと聞きます。この貯水池の近くにも稲作地は残っていないけど、島のいたる所でビワの木が栽培され育っています。枇杷は果実も葉っぱも、この島の特産で、貯水池は今でも現役です。

平さんの棚田

島は、その地形からして平地がほとんど無いように見受けられます。耕作地はおのずと、段々畑や棚田になる。山の斜面を開拓し、石を積み重ねて農地を造っていく。その先人の苦労は想像を絶するもののように思えます。海沿いの平な道から見上げて、山道を自転車を押しながら回りを見渡しても、あちこちに石積みが見られます。

そして、目指すは「平さんの棚田」。島の観光スポットの一つになっており、集落からは、なだらかな坂道を四^キ行程つ

た先にあります。この四^キの行程は実に美しく、楽しいものでした。道は進むに連れて高所となり、遙かなる海とそこに浮かぶ島々が見渡せます。前方の海の上に低い雲がかかり、雨が降っているのが見える。後ろを振り返れば、これまた雨雲が追いかけて来る。追い抜かれた後に、海を見下ろせば小さな虹がかかっている。「美しい」を独り連発しながら自転車を押し進んでいると、トラクターを脇に止めたおじいさんに出会う。平さんでした。道の横、山の斜面にはえてる木に蜜のようなもの（なんなのか聞いた

たけど、わからなかった）を塗りカブトムシをおびき寄せている最中でした。夏休みに帰って来る孫のためだと言つ。

「棚田に行くのか」

「うん」

「もう少し早ければ小屋を開けておいたのに。閉めてきたところじゃ」

「まだ先ですか」

「あと少し、気をつけて行けえ」

その言葉の通り、しばらく行くと道の右手に迫っていた樹木が生い茂る山の斜面が突如なくなり、高く積み上げられた石垣が目の前に現れました。思わず出た「ウオ」と

いう声と足音に驚いたのか、大きな赤いハサミを持った力二たちが石垣の中に隠れていく。雨が上がった後で夕暮れも間近、辺りは凜とした空気に包まれていきます。荘厳という言葉がこれほど当てはまる風景を私は見たことがない。この棚田を造り守り続けている平さんに、さつき会った時にもっと敬意を表しておくべきだったと後悔してしまう。

「美しい」何回目だろうか、この言葉を口にするのは。高く石積みされた棚田のあぜ道を歩く。稲は緑。そして、海が広がる。

【編集委員 T】